

# 未来の看護職を 育てる看護教員

第2回 滋賀県立総合保健専門学校（滋賀県）

滋賀県の南西部にある守山市。同市にある滋賀県立総合保健専門学校は開校から半世紀以上の歴史を持っている。1961年に滋賀県立歯科衛生専門学校を、63年には滋賀県立高等看護学院を開校。77年に2校を統合する形で滋賀県立総合保健専門学校として開校し、延べ4,200人の看護師を輩出してきた県内の伝統校の一つ。

「伝統校ではありますが、シミュレーション教育やICTなどの導入も積極的に取り入れるなど、新しいことにチャレンジする風土があります」と話すのは看護学科で専任教員を務める加藤紗香さん。県立病院から看護職が定期的に関校へ異動することもあり、そうした風土が醸成されやすい。

## 「考える看護師の育成」を目指し 看護教員へキャリアチェンジ

加藤さんの看護教員としてのキャリアは5年。以前は、小児科や精神科など臨床現場で活躍していた。中堅として後進の育成に取り組む機会が増えるようになり、次第に教育に関心が向くようになった。

加藤さんが当時から目指しているのは「考える看護師の育成」。しかし、臨床現場での指導を続ける中であることに気付いた。「新人さん

が一人前になるまで、先輩看護師がさまざまな指導をしますが、私たちの学生時代と現在とは病院や看護師などを取り巻く状況が異なるため、単に新人看護師だけの努力ではどうにもならないのではないかと思います」。周囲の教育的支援がもっと必要だと考えるようになり、教育現場の門を叩いた。

病院勤務時代は実習指導員を務める機会が少なかったため、加藤さんが看護教員に抱いていた印象は「よく分からない世界だけど、忙しそう」だった。実際に教員になってからは、「こんなこともやるのかという驚きの連続でした」という。また、教員としての1年目は「全てを知っていなければいけないと考え、学生が行う一つ一つを見てチェックするなどとても肩に力が入っていました」と振り返る。

しかし、2年目に受講した専任教員養成講習会で学生と一緒に作り上げていく重要性を知った。「看護に絶対はないので、教員として学生に看護師の視点を持つことを伝え、その視点を持ってもらった上で、学生と共に考えるというプロセスを大事にできるようになりました」。

## 学生の「自分の力でできた」が 何よりの喜びに

考えることと同様に重要なことは、それをどう実行するか。その力を学生が習得する過程に関わることは看護教員の醍醐味（だいごみ）の一つという。「臨床現場で、これまで自然に行ってきたことを、一つ一つの要素に分解して、学生に伝わるような形で再構築することは大変でもありましたが、自らの看護を振り返ることに



3年生の卒業前技術トレーニングの様子

もなりましたし、他者に伝える力を養うきっかけにもなりましたね」。

自らの考えを他者と共有する作業は、看護実践の要となる。しかし、実習の場面でうまく自らの考えを伝えることができない学生もいる。その場合、教員が学生の考えを吸い上げて、言語化の過程をサポートする。

ただし、教員が介入し過ぎると自立性を損なってしまうため距離感のバランスが大切という。「学生には、『先生がいたからできた』ではなくて、『自分の力でできた』という成功体験を積み上げてほしいので、支援はしますが、基本的には黒子役に徹します」と加藤さんは話す。そうした過程を経て、課題を達成した学生の姿を見るのが「何よりの喜び」と頬を緩める。

「以前の私のように、『教員は何でも知っていなければいけない』と考えて教育の道へ進むことをためらっている人もいます。もちろん臨床現場との違いはありますが、新たな発見や学びがたくさんあるので、興味がある方はぜひ看護教員としてのキャリアにチャレンジしてほしいですね」。